

一世と三世

——物語・記憶・歴史をめぐる文学

僕の祖父は太平洋戦争に従軍していた。父は終戦の年に生まれた。戦争を経験した世代から見れば、僕は三世ということになる。中国やインドネシアに従軍した祖父は、陰惨な戦争の現場を目撃していたはずだが、孫である僕にはほとんど何も語ってくれなかった。逆に、父にはあやうく死にかけた体験などをかなり詳しく話していた。そのせいか、父経由で聞かされる祖父の記憶は、僕にとってはどこか小説のような気配を帯びたものだった。

ほとんど戦争の記憶とは切り離されて育ったがゆえに、自分の人生のどれくらいが、戦争や祖父の体験によって影響されて今にいたるのだろうか、という疑問は、繰り返し僕の前に現れてくる。そうして、気がつけば戦争をめぐる小説ばかり翻訳している。

人が生まれ、死んでいく時間の連なりの中で、誰かが「一世」であったり「三世」であったりするとは、どういうことなのだろう。戦争をはじめとする社会の大きな変化や転換、あるいは異なる言語圏や国家の領土への移住といった出来事によって、人は望むと望まざるにかかわらず当事者になる。子供の世代が登場すると、世代間との関わりのなかで、それぞれが「一世」や「二世」や「三世」という自己認識とともに生きることになる。個々の人の願や思惑をはるかに超える出来事と、その余波は、どこまで当事者の、そして後続世代の者たちの人生に影響するのだろうか。そして、それはどのような物語を生み出すのだろうか。

そうした問いの一端を、時も場所も言語もさまざまな文学を通じて探してみたい、とかねがね思っていたところ、今回小特集という形でそれが実現した。寄稿くださった各氏に深く感謝申し上げるとともに、さまざまに浮かび上がる問いをこの先も引き受けていく一助としたい。

藤井 光